



だが、著者は「イデオロギー的な」断罪で同法の議論を締めくくらない。問題の根源を掘り下げ、ついに「薬物療法の潮流」に反旗をひるがえす方向に傾く。やがて「医療のなかに、民主主義を息づかせる試みがある」（149 頁）という希望の発見に至る。

地域で仲間と暮らす。そこで、（精神科症状の）再発を受け入れてくれる文化を相互に求めあう。そうした模索の中に明日を見いだそう、と浅野さんは訴えるのだ。